



巨人伝説 (復活篇)

巨人伝説 〈復活篇〉

笠井 潔

徳間書店 (新書)

(2/28刊・¥680)

近未来SFとあって、確かにそれはそうなのだろうが、結局作品世界は現実の「近未来」をはるかに飛び越えてしまう。異常気象、氷河期の再来で壊滅する世界の物語は、一見パニック小説の常套的展開に見える。しかし、そこには、著者の日本に対する文明批判が込められている。日本の視点が跡形もなく消散していくありさまは、普通のパニック物が、小市民的な日常の崩壊を、守りの立場から描くのと、全く対照をなしているのだ。現在の社会の根底にある、農耕文明自体を否定する「革命」なのである。しかも、結末は「ツアラ復活」(本書がSFAに分載される以前に載った、一連のツアラ英雄伝説)へとつながっていく。物語は、おそらく、一般SF以上に絵空事に近いヒロイック・ファンタジーに、違和感なく進む。

天候の異常、古代ミケーネと縄文時代を結ぶミノタウロス符号、天から降る小惑星、そして復活した古代の英雄神——。同じ革命であつても、「日本アバッチ族」とは違う著者なりの思想と、ぱっくりと口を開いた非日常の世界、その彼方の神話——雄大なプロローグは、さすがというべきだろう。